

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

島 田 喜 行

はじめに

本論の目的は、エドムント・フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) の超越論的現象学の方法である現象学的還元を「教育」という観点から検討することである。

「現象学」あるいは「現象学的」という語は、いまや哲学だけでなく、さまざまな学問分野において散見される。教育学もまたその例外ではない。だが、教育学における「現象学的」研究は、論者がみる限り、教育現象についてのフッサールの「超越論的現象学」的な研究ではない^①。なるほど、こうした研究動向は、フッサール現象学を何らかの教育問題に直接適用することに不向きであるということを示しているのかもしれない。しかし、このことは、超越論的現象学には、教育と切り結ぶような論点が何もないということを意味しない。というのも、フッサールは、超越論的現象学をわたしたちがより善く生きるための手段であると考えていたからだ。フッサールは、超越論的現象学によつてはじめて可能になる吟味の生を、「恒常的な自己監査における自己規律、自己陶冶、自己規制化の生」として、

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

「不断の自己向上」において実現されるべき倫理的な生と表現する (vgl. Hua XXVII, 39)²⁶⁾。

こうした脈絡において、フッサールは次のように述べている。現象学的還元は、超越論的な次元で、*「わたしが自覚的・主体的に世界の見方を学び直す」*ための方法であり、これが「現象学的還元がもつ教育的なもの *das Erziehische der phänomenologischen Reduktion*」 (Hua IV, 179) である²⁷⁾と。

そこで、本論では次の二つの課題に答える。第一の課題は、現象学的還元によってはじめて可能になる、超越論的現象学がどのようなタイプの教育であるかを明らかにするために、超越論的現象学の学問性格を明確にすることである。第二の課題は、超越論的現象学が、教育哲学が取り組むべき問題に対して、どのような知見を提供することができるのかを示すことである。

考察の手順は次の通りである。まず、フッサールの超越論的現象学の課題を確認し (第一節)、その課題である超越論的主観性の露呈と解明を可能にする方法である現象学的還元の異様さを明らかにする (第二節)。次に、独特の自己省察である超越論的現象学の実践的性格とフッサールにおける「自律」概念との関係について考察し (第三節)、ここから超越論的現象学と教育とがいかなる仕方で切り結ぶのかを指摘し、現象学的還元がもつ「教育的なもの」を提示したい (第四節)。

第一節 フッサール超越論的現象学の課題——「超越論的主観性」とは何か——

本論の最初の問いはこうである。フッサールの超越論的現象学とは何のための学なのか、フッサールにとっての哲

学とは何か。この問いに答えるための手がかりが、フッサールが行った超越論的現象学についての、最初のまとまった講義の記録である『現象学の理念』（一九〇七年）の編者ビーメル（Biemel, W.）による序文のなかにある。

もしわたしが自らを哲学者と呼ぶことが許されるとすれば、そのときわたしが何よりも先に挙げる、自分自身のために解決しなければならない一般的な課題、それは理性批判であると考える。論理的理性と実践理性、そして価値づける理性一般の批判である。一般的な特徴において、理性批判の意味、本質、方法、主要観点を明晰なものにすることなしに、またその〔理性批判の〕一般的な構想を十分に考え、企画し、論定し、そして基礎づけることなしに、わたしは真に、そして本当の意味で生きることができない（Hua II, VIII: フッサールによる一九〇六年九月二五日付けの覚え書き、「」は論者による補足を示す）。

フッサールが、超越論的現象学を創設した根本動機は理性批判であった。ここで注意しなければならないことは、論理的理性（理論理性）だけでなく、実践理性と価値を判断する理性も含む、わたしたちの生のあらゆる場面で働いている理性が批判される、ということだ⁽³⁾。この理性批判を可能にする方法が、「現象学的還元」である⁽⁴⁾。

では、「現象学的還元」の眼目は何か。それは、わたしたちの日常の生においては、けっして気づかれることなく隠されてしまっている、ある独特の働きを露呈することができるようになる、ということである⁽⁵⁾。その隠れた働きが、フッサールにとっては「理性」の別称でもある「超越論的主観性」である⁽⁶⁾。しかし、これはいったい何なのか。

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

この問いを解くために、フッサールによる「超越論的」という語の定義を確認したい。フッサールは、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（一九三六年）において、こう定義している。「超越論的」とは、「すべての認識形成の究極的源泉への遡行的問いという動機、認識する者による自己自身とその認識する生への自己省察という動機」(Hua VI, 100)を表すものである」と。この定義を踏まえることによって、超越論的現象学の課題がより明確な仕方で理解される。

わたしたちは、普通に生きているとき、自己や人間、世界についての何らかの認識をもっている。しかし、日常生活においては、そうした認識がどのような仕方で形成されるのか、その真偽、妥当性、正当性はどのように保証されるのかといった問題について無頓着である⁷⁾。

フッサールは、このようなわたしと世界との関係について（わたしと他者との関係をも含めて）、次のように述べている。

それ「世界」は、わたしたち人間仲間 *Mimenschheit* という地平のうちにある人間としての、したがって、他者と共にあらゆる顕在的な結合関係のうちにある人間としてのわたしたちみなにとつて、「唯一の」世界として、全員に共通の世界として、自然な仕方では、あらかじめ与えられている。このように、それ「世界」は、……「わたしたちの生にとつての」恒常的な妥当基盤であり、……わたしたちが考えることなしに要求するような「生の」自明性 *Selbstverständlichkeit* についての、つねに用意されている源泉なのである (Hua VI, 124)。

フッサールは、まさにこの自明性を問題にする。こうした世界理解が自明なものとして受け入れられている根拠は何か、と。フッサールは、わたしたちの自然な世界認識のうちに気づかれることなく付き纏っている「素朴さ」があるのではないかと問いかける。フッサールは、この問いに答えるために、あらゆる認識の究極的源泉へと立ち戻り、認識の仕組みを自分の目で精査する必要を説いたのである⁽⁸⁾。

以上のことから、超越論的主観性とは何か、という問いに答えることができる。超越論的主観性とは、日常の生における認識のうちに、気づかれることなく潜んでいるかもしれない「素朴さ」の有無を調べるために、わたしたちがそこへと目を向けなければならない、わたしの認識の究極的源泉のことであり、あらゆる認識形成の起源としてのわたしの「働き *Leistung*」そのものである、と⁽⁹⁾。

第二節 超越論的現象学における「超越論的構成」という問題構制

しかし、現象学的還元という方法は、日常の生を生活している者にとってきわめて異様なものである。というのも、還元は、わたしたちの日常的な認識の仕組みを再検討するための非日常的な手続きだからである。この異様さは、還元を遂行することから生じてくる、認識についての次の二つの変更を確認することから理解される。それは、

- 変更① 普通に生きている場合に自明なものとしてされている、わたしと世界との関係についての認識（世界認識）に対する徹底的な変更

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

変更② 普通に生きている場合に自明なものとされている、わたしは一人の人間であるという認識に対して、ある特別なわたしのあり方（自己認識）を追加するという変更

である。この変更について、フッサールは次のように述べている。

エポケー「現象学的還元」とは、それを通じて、わたしが、自らを自我として純粹に把握し、しかも、それ固有の純粹な意識生をとまなう自我として純粹に把握する根本的で普遍的な方法である。この純粹な意識生とは、この「意識生の」なかで、そしてこれを通じて、客観的世界の全体がわたしにとって存在し、それがわたしにとってあるがままに存在するようになる意識生のことである。あらゆる世界的なもの、あらゆる空間時間的な存在がわたしにとって存在しているということ、このことは「……」わたしがそれらを経験し、知覚し、想起し、何らかの仕方でも思考し、判断し、価値づけ、欲求する等々ということを意味している。周知のように、こうしたことすべてをデカルトは我思う *cogito* と名づけたのである。「……」それ「世界」は、その意味全体を、その普遍的な意味と特殊な意味をもつばらそのような我思う *cogitationes* から手に入れるのである (Hua I, 60)。

この引用を踏まえつつ、変更①を一言で表現すればこうである。わたしと世界とは、常識的な認識が示すような、互いに独立した関係にあるのではない。わたしと世界とは、デカルトがコギトと呼んだ意識の志向性によって架橋された、不断の「志向的相関関係」のうちにある、と。変更②を端的に表現すればこうである。わたしは、世界のなか

の一人の人間として存在するだけではない。同時にわたしは、世界に対しては、〈わたしがそのなかで多くの他者と共に生きている現に存在する世界〉という意味を、自己に対しては、〈世界のなかで生きている一人の人間（人間的自我）〉という意味を与える。「純粋な意識生」をともなう「自我」としても存在する、と（フッサールは、この純粋な意識生の自我を人間的自我と区別して「純粋自我」(Hua III/1, 67)と呼ぶ)。

フッサールは、変更①における「志向的関係」と変更②における「純粋な意識生」（超越論的な次元）での意味付与 *Sinngabung*（あるいは意味形成 *Sinnbildung*）の働きを「超越論的構成」(Hua III/1, 352) というタイトルで表現する。超越論的主観性とは、この「超越論的構成」が生じている現場のことであり、まさにそれが働いている領野のことである⁽¹⁰⁾（フッサールは、この超越論的主観性による構成の仕組みを説明することが自らの課題であるということを明確にするために、現象学を「構成的現象学」とも呼んでいる (vgl., Hua III/1, §151-153)）。

しかし、ここで直ちに指摘しておかなければならないことがある。それは、現象学的自己省察には、「途方もない困難」が待ち受けているということである (vgl., Hua VI, 265)。その「困難」とは、わたしが世界のなかの人間的主観性であるだけでなく、常に同時に、〈世界〉や〈人間〉という意味を「構成する」〔超越論的〕主観性〕でもあるということ、わたしたちは簡単には理解することができない、ということだ (vgl., Hua VI, 266)⁽¹¹⁾。

わたしたちは、日常の生についての認識をあまりにも自明なものともみなしているために、還元の遂行によって引き起こされる変更を異様なものと感じずにはいられない。それだけではない。還元を遂行したからといって、その変更の意味が直ちに理解されるというわけでもない。というのも、還元は、「超越論的構成」という、日常の生のなかでは完全に隠されてしまっている問題構制についての探究の端緒を与えるにすぎないからだ。

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

エポケーの空虚な一般性（＝現象学的還元をただ遂行するというだけのこと）は、何一つ解明しない。それ（エポケー）は、そこを通過することによって、純粹な主観性による新たな世界が露呈される、たんなる表門 *Eingangstor* にすぎない（Hua VI, 260）。

超越論的主観性の「実際の露呈は、極度に厄介で細分化された、具体的な作業の事柄」(*Idid*)であり、そこにはさまざまな困難が待ち受けている。もっとも、そう言えるのは、フッサールが、自ら超越論的現象学を行ったからである。ここに、あらゆる認識の究極の源泉へと遡行する現象学的自己省察の実践的性格が明確に姿を現す。超越論的現象学は、フッサール（やその後継者たち）による自己省察の成果を、学問的に保証された知識として学べば済むというものではない。そうした知識を手引として、わたしたち一人ひとりが還元を遂行し、あらゆる認識の究極の源泉としての〈わたし〉の超越論的主観性の探究を実践しなければならない。

第三節 超越論的現象学における「自律」

フッサールは、この自己省察を「自己責任」および「自律」の概念と重ね合わせている。この点に超越論的現象学のもう一つの学問性格がある。

人間の人格的な生は、自己省察と自己責任の諸段階を経過する。この個別で、偶然的な作用から普遍的な自己

省察と普遍的な自己責任の段階へと、あるいは、自律という理念を意識的に把握する段階、己れの人格的な生全体を普遍的な自己責任における生の総合的統一へと形態化する意志決断という理念を意識的に把握する段階へと経過する。これと相關的に、「人間の人格的な生を生きる自我は」自分自身を真なる自我へと、自由で、自律的な自我へと形態化する。それ〔真なる自我〕は、生来の理性を現実化すること【を望み】、自分自身に忠実であるという努力、理性的―自我として、自分自身と同一であり続けるという努力を現実化すること【を望む】自我である。しかし、こうしたことを、個々の人格と共同体との不可分の相関関係のうちで〔その自我は現実化することを望む〕(Hua VI, 272 f. 【】は編者による補足を示す)。

この引用で、「普遍的な自己省察」と表現されているものが、現象学的自己省察である。これが「普遍的」と形容されるのは、この省察が、わたしたちのあらゆる認識の究極的源泉へと遡行しようとするものだからである。フッサールは、この自己省察を、理性をもつ者に課せられた責任であると考える¹²⁾。ここからフッサールの「自律」概念が規定される。すなわち、理性的存在者であるという自覚と責任において、理性的―自我であり続けようとするわたしの個人的な努力であるということ、しかも、個々の人格と共同体との不可分の相関関係のなかでの個人的努力であるということ、これがフッサールの「自律」である。

フッサールの自律が、理性批判として進行していくことは明白である。しかし、ここで注目しなければならないことは、この理性批判が、理性をもつ個人の自己責任(わたしの責任)と結びつけられるだけでなく、最終的には全人類にまで及ぶ普遍的な自己責任とも結びつけられる、ということだ(フッサールは、このような、わたしたちの生全

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

体に関わる理性の全般的批判を通じて、最終的には人類の刷新 *Erneuerung* を目指す動機を「認識倫理的」(XXXV, 314)と表現する)。

第四節 超越論的現象学における「教育的なもの」

しかし、これまでに明らかにした学問性格に依拠して、超越論的現象学はひたすらわたしに定位した独我論であり、独りよがりの独断論ではないか、という批判が考えられよう。そこで、この批判について、「教育」を念頭に置きながら考えていきたい¹³⁾。

ここで重要な手引きとなるものが、「それ〔世界〕は、その意味全体を、〔……〕もつばらそのような我思うから手に入れる」という上述の引用文である。還元の遂行とともに、世界は、わたしの超越論的主観性の意味付与によって構成されるものへと変更されたのであった。問題は、この意味付与の働きがいったいどのようなものか、ということである。

もし意味付与が、超越論的なわたし一人による手前勝手な世界創造であったならば、現象学的自己省察は、わたしによるわたしの創造する働きについての精査でしかないのだから、現象学は独我論であることになる。しかし、意味付与は、そのようなものではない。というのも、意味付与による世界構成は、わたしと他者との超越論的な次元での共働において生起するものだからである。いつそう正確に表現しよう。もちろん、世界構成は、わたしの超越論的主観性の働きによるものである。しかし、わたしの超越論的主観性の働きのなかには、つねにすでにわたしではない他

なる者に由来する超越論的な働き（超越論的意識）が独特の仕方であり込んでいるのである。フッサールは、わたしの超越論的主観性への、他なる者の超越論的意識の混入を可能にするこの独特の仕方を「移入 *Einführung*」と呼ぶ。

誰の心であれ心はすべて、その純粹な内面性へと還元されて、「……」その本源的に固有独自の生を持つている。けれども、それ〔心〕には、原本的に固有独自の仕方、その時々の世界意識をもつということも属している。しかも、それ〔心〕が移入経験をもつことによって、世界、それも〔わたしと〕同一の世界を所有するものとしての他者について経験する意識をもつことによって、換言すれば、それぞれに固有独自の統覚において〔世界を〕統覚する他者について経験する意識をもつことによって、その時々の世界意識をもつということが属して *etc.* (Hua VI, 258)。

世界がわたしに立ち現れてくる「世界統覚 *Weltapperzeption*」が起こったとき、その世界は、わたしだけに妥当するものとして立ち現れてくるのではない。その際、世界を共に構成する他者が、わたしたちにとって「一つの共通の世界統覚のための複数主観として前提されている」。わたしの世界統覚は、「志向的連結 *intentionaler Konnex* という間接性のなかで」、つねに他者の世界統覚との交錯関係のうちで生起する。それゆえ、わたしの世界統覚は、前提される複数主観に対応する仕方、「つねに双方向的に修正しあう変化でもあるような、たえず流れゆく変化のなか」で生起するものである (vgl. Hua VI, 258)。ここに明確に示されているように、フッサールの意味付与は、超越論的なわたしによる手前勝手な世界創造ではなく、他なる者との相互修正という契機をもつ共働なのである¹⁴⁾。

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

フッサールは、世界構成に関与する、「わたしの世界を共に構成する者」(Hua XV, 162)としての他なる者の超越論的意識のことを「超越論的相互主観性」(Hua VI, 266)と呼ぶ。現象学は、わたしの超越論的主観性を精査するにつき、必然的にこの超越論的相互主観性も精査することになる。論者は、ここにフッサール現象学が教育——とくに「教育関係論の問題構制」——と切り結ぶ場があると考える⁶⁵。それは、わたしにとってもなじみ深い世界統覚が、「わたしのもっとも身近な日常的な環境世界の他の人々」(Hua XV, 170)との関係——多くの場合は母子関係であろう——から獲得された「一般的な類型群 *allgemeine Typik*」(Hua XV, 197)に基づいて生起する、ということだ。

人間にとつての名称 *Namen*。幼児は、母親によって話される音声を名づけられたものへと誘導する指示や記号として理解することを学ぶ〔……〕。〔 〕ともかく名称というものは、その前提【に】客観的世界をもっている。幼児は、母親や父親などを名づけることを理解することを学び、それらが指示するものと同じものを名づけることを理解することを学ぶ (Hua XV, 606【 】は編者による補足を示す)。

幼児は、親子関係のなかで名称や名づけを学ぶだけでなく、この学びを通じて、客観的世界のあり方についても学ぶのである⁶⁶。わたしたちは、「両親の子として、……彼ら〔両親〕やそれなりの仕方でも成熟し、「大人に」成長したコミュニケーションを取り合う共主観による教育から *aus Erziehung*」(Hua XV, 178) 大人になっていく。ここでの大人になるということは、わたしにとってもっとも身近な他者と日常生活の大部にかんして不調和を感じることなく生きることができるようになるということだ (言い換えれば、そのような他者とわたしは同じ一つの世界を生きてい

るといふことが当たり前のこととして感じられる世界を構成することができるようになるということである⁴⁷⁾。

わたしたちが、日常生活をそれなりに送ることができるようになるためには、まず他者から教えを受け、他者に学び、他者によって育まれるということがなければならぬ。わたしたちは、他者から世界の見方を学ばなければ、この世界のなかで他者と共に生きる者になることができない。この事態を超越論的な次元からみればこうだ。わたしはまず、この世界が誰（超越論的な他者）と共に構成されるべきなのかについて教わり、学ばなければならぬ、と。このような超越論的な次元での学びを通じて、教授される構成の相関者としての世界——その具体的な内実は多様なものであろう——は、わたしが大人になるとともに、ほとんど意識の前景に現れることがないほどにまで、わたしにとってなじみ深い、自然な、日常の生の世界となる。現象学が問うのは、この普通はほとんど意識されることがないままに生きられている自然な世界とその見方のなかに潜んでいる（かもしれない）素朴さに他ならない。ここに、わたしたちは他の人々と共にしか生きていけない存在者であるという教育関係論に関わる根本テーゼについての、超越論的相互主観性を基軸とした新たな解釈が示される⁴⁸⁾。

以上のことから、本節での二つの批判に対して反論することができる。

独我論に対する反論はこうだ。現象学は、わたしと他者との関係を、わたしの超越論的主観性と、そのなかで共働している超越論的相互主観性との関係として問い直すものであるという点において、独我論ではない、と。

独断論に対する反論はこうだ。なるほど、現象学が行う理性批判は、わたしが理性的であろうとする個人的な努力である。しかし、この努力は、個々の人格と共同体との不可分の相関関係のなかでの努力であり、その限りで、わたしと共に共同体を構成する他者によって批判されうるといふ可能性がつねに担保されている個人的努力である。この

点において、超越論的現象学は、独りよがりの独断論と一線を画する。

さらに、超越論的現象学は、わたしの理性（わたしの超越論的主観性）についての自己省察という仕方では実践される独特の個人的な自己教育活動であるだけではない。それは、わたしたち人間に与えられてはいたけれども、これまで気づかれないままに隠されていた理性批判の新たな一形態を提示したという意味で、理性批判にかかわる人類の潜在能力を引き出すことを助ける教育活動でもあるのだ、と。

おわりに

本論は、第一に、超越論的現象学が、日常の生における世界経験とその理解（世界の見方、この世界を生きること）を、その究極の源泉に立ち戻ることによって精査しようとする自己省察であることを明らかにした¹⁹⁾。第二に、日常の生においては気づかれることなく機能しつつ、それを成立させている（わたし―世界―他者）の超越論的な次元での独特の相関関係を明らかにした。そして第三に、独我論批判に答えるなかで、超越論的構成を可能にするため、わたしに対する他者からの教授と学びがあることを明らかにし、この点で、超越論的現象学が教育関係論の問題構制に対して新たな知見を提供することができるということを指摘した。これが、現象学的還元がもつ、一つ目の「教育的なもの」である。そして第四に、独断論批判に答えるなかで、現象学的自己省察が、自己教育活動であるのみならず、理性批判にかかわる人類の潜在能力を引き出すことを助ける教育活動でもあるということを明らかにした²⁰⁾。これが、現象学的還元がもつ、二つ目の「教育的なもの」である。

註

フッサール全集 (*Husserliana*, Martinus Nijhoff/ Kluwer/ Springer, 1950-) からの引用は、Hua と略記し、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表記する。

(1) 教育学において使用されている「現象学」は、一人称パースペクティヴから経験されるものとしての教育現象についての研究に対する名称、教育に関する具体的な経験の本質的特徴とは何かについての研究、わたしたちの意識の与件を直接吟味することによって識別可能である、内観によってアクセス可能な特徴についての研究に対する名称である場合が多いように思われる。

もちろん、フッサール現象学に依拠してさまざまな教育現象の事象そのものを問いたず研究も数多く存在する。例えば、中田基昭『現象学から授業の世界へ——対話における教師と子どもの生の解明——』東京大学出版会、一九九七年。これ以外にも、以下の論考は、フッサールの思考に根ざして「子どもそのものに準拠する」という視点から、ランゲフェルド (Langefeld, M. J.) の教育学を手引きにして子ども現象学を展開している。渡辺英之「第7章 子ども現象学における道徳教育の視点」(佐野安仁・荒木紀幸編著『道徳教育の視点 第3版』晃洋書房、二〇一二年、一七八—一九六頁)。さらに Chamberlin, J. D., *Phenomenological Methodology and Understanding Education*, in: Denton, D. E. (ed.): *Existentialism and Phenomenology in Education*, Teachers College Press, 1974 (D・E・デントン編『教育における実存主義と現象学』菊池陽次郎・他訳、晃洋書房、一九八九年)。

(2) ここでのフッサールの見解は、教育に関する以下のデュエイ (Dewey, J.) の定義と大いに重なるだろう。「教育の過程は連続的な再編成、改造、変形、過程なのだ」(デュエイ『民主主義と教育(上)』松野安男訳、岩波書店、一九七五年、八七頁)。

(3) フッサールは、超越論的現象学が扱う問題を端的に「理性の問題」(Hua VI, 7) と表現している。フッサールの「理性」観は、次の一文に集約されている。「明らかにそれ(理性)は、認識(すなわち、真かつ真正の認識、理性的認識)についての学問分野のテーマであり、真かつ真正の価値づけ(理性の価値としての真正の価値)についての、倫理的な行為(真に善い行為、実践理性からの行為)についての学問分野のテーマである」(ibid.)⁷。

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

もちろん、フッサールは、この理性批判が途方もない企てであることを自覚していた。彼は上述の覚え書きの続きにこう記している。「そこ〔理性批判〕では、とても大変なことが問題になっているのをわたしは承知しているし、『哲学の歴史のなかで』偉大な天才たちがそこで挫折したことも知っている。だからかりにも自分を彼らに比肩しようとすれば、わたしは最初から絶望せざるをえない」(Hua II, VIII)と。

(4)メルロー・ポンティは、この現象学的還元とは何か、という問いこそ、フッサールをもっとも悩ませた問題であったと述べている。「おそらく、彼〔フッサール〕が自分の言いたいところを自分でよく納得するのにこれ以上時間をかけた問題はほかにないわけだし、彼がこれ以上しばしばたち帰って論じた問題もほかにない」(Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la Perception*, Gallimard, 1945, p.11, M・メルロー・ポンティ「知覚の現象学」竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、一九六七年八頁)と。

(5) Staiti は、現象学的還元の役割についてこう述べている。「現象学的還元の機能」は「自然的で人間的な自己―諒解 self-apprehension を突破し、超越論的次元にある主観性を露呈するという自己―理解 self-understanding の可能性を開示する」ものである。換言すれば、現象学的還元は、「根本的に新しい態度、『すなわち』自然的態度という枠組みのなかでの一人称パースペクティヴと混同されるべきではない現象学的態度を開示する」ものである」と (Staiti, A., *Systematische Überlegungen zu Husserls Einstellungslehre*, in: *Husserl Studies* 25, Springer, 2009, cf. p.219)。

(6) フッサールは「超越論的主観性」を「恒常的に隠れた仕方で機能する理性」(Hua VI, 97)と表現している。

(7) 日常の生において、わたしは、この世界に生きている一人の人間であると思っている。その際、わたしは、世界を、空間的に、そして時間的に果てしなく「生成しつつまた生成してきた一つの世界」であると思っている。わたしは、このような世界を「現にそこに存在するもの」であり、わたしによって経験されるものであると思っている。もちろん、わたしは、この世界のなかで、わたし以外の多くの人が今まさに生きていることを知っている (vgl. Hua III/1, 56f.)。ちなみに、わたしは、この世界にはかつて多くの人が生きていたということも知っているし、また、これから多くの人が生まれてくるであろうと、そして生きている。わたしは、この世界を、わたしが生を受ける(存在する)より前にすでに存在しており、わたしが生を終えた(存在しなくなった)後にも存在するであろうと思っている。この意味において、わたしは、この世界をわたしの存在とは独立のものだと理解している。別様に言えばこうだ。普通に生きている場合、わたしが存在するためには世界の存在

- が必要であるが、世界の存在にとつてわたしの存在は必要というわけではない、とわたしは考えている」と。
- (8) ルフトは、この素朴さについて次のように指摘する。「自然的態度の素朴性は、自然的態度のうちに存在しているかぎりわたしはそのうちに存在していることについて一切知ることがない、という事実のうちにあるというだけでなく、一つの態度としてそれについてわたしは知ることがないので、わたしはそれが唯一可能な『生の様式』であるという信念のもとに生きつゝいるという事実のうちにもある」(Luft, S., *Husserl's phenomenological discovery of the natural attitude*, in: *Continental Philosophy Review* 31, Springer, 1998, p.159) 頁。
- (9) フッサールの「超越論的主観性」の解釈に関して、ここで提示したものは異なる解釈も存在するということを付言しておきた。Vgl., Landgrebe, L., *Husserl's Abschied von Cartesianismus*, in: *Der Weg der Phänomenologie*, Gütersloher Verlagshaus, 1963, S.163-206.
- (10) フッサールは、現象学的還元による変更をこう表現している。超越論的構成の次元にまで踏み込んだ「認識にしたがえば、わたしたち人間にとつては、自分自身の存在が世界の存在に先行するということも真である」(Hua VI, 266) 頁。
- (11) フッサールは、この「困難」を「人間的主体性のパラドクス」(Hua VI, 182)と呼んでいる。
- (12) ラントグレーベは、超越論的自我が負うべき責任を明確に主張し、この責任の主体である超越論的自我を「人倫的自我」と呼ぶ(Landgrebe, L., op. cit., S.196)。
- (13) 本論における「教育」の定義は、相澤伸幸の以下の指摘に基づく。「教」という漢字の意味は、軽くたいたいて習わせるといふのがそもその意味であり、そこから、子どもを良い方向へと導く、知識を授けるといふ意味が形成されてきたという。つまりこの教という漢字一文字だけで、大人が子どもに教え導く、あるいは子どもは大人から習うという関係性が表現されていることになる。「ふと月の合字である『育』という漢字の意味は、赤子が母親から生まれてくる様子を表現しており、それに加えて『そだつ』『はぐくむ』といった今日でも用いられる意味が形成された。このように、育は母親と子どもとのつながりを表した漢字である」。「ドイツ語のエアツィーウング (Erziehung) も同様で、er『内から外へ』+ziehen『引き出す』というのが基本となっている。つまり education を始めとした『教育』を表す欧米語のもともとの意味は、人間(これは生徒でもよいし、自分以外の者全体を指す)の能力を引き出すことを助けることであり、それが教育の原義であり、それは教育学を学ぶ上で忘れてはいけないことの一つである」(相澤伸幸『教育学の基礎と展開 第二版』ナカニシヤ出版、二〇〇

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

フッサールの現象学的還元がもつ教育的なもの

七年、七一八頁参照)。

- (14) 「認識主観としてのわたし、わたしは他の人々の助けによって認識し、もろもろの認識の働き(認識形成)を遂行するが、これら(認識の働き)は、存続するものとして、『世界』と、存在地平と一つとなって、わたしの共同研究者にとって接近可能なものとなり、彼らにとつて規定されたものとなる」(Hua XV, 200 f.)。

- (15) 渡邊隆信は、教育関係論についてこう述べている。「教育関係論の主要な目的と意義」は「子どもや大人の人間形成の可能性をより多様で開かれた『関係』のなかに見出すことにある」。というのも、「私たちは、直接的であれ間接的であれ、『関係』をまったく介さないような教育を、想定することはできない」からである、と。渡邊は、教育関係論の主要な目的と課題をこのように規定したうえで、さらに「『教育』概念を『共同体における多様な関係を前提にした子どもや大人の人間形成』というように、修正することが可能かもしれない」と提言しつつ、「教育関係論とは、『教育』全体のイメージを膨らませ、より豊かにする、発見的で創造的な研究領域である」と述べている(渡邊隆信「教育関係論の問題構制」教育哲学会編『教育哲学研究 100号記念特別号 教育哲学研究の現在・過去・未来』教育哲学新聞社、二〇〇九年、一七四―一九〇頁参照)。

- (16) 「客観的」とは、「わたしが経験可能なものとしてもつものと、誰であれ他者が経験可能なものとしてもつものが同じものである」(Hua XV, 489)とわたしに意識されているという事態を指す語である。

- (17) フッサールは、超越論的相互主観性をめぐる問題群(移入の働き、人間の成長と世界構成との関係、世界構成に関する正常性と異常性の問題など)について、安易な結論を提示することを極力避けるために、繰り返し慎重な分析を重ねている。しかし、本論では、そうした分析に言及することはできない。

- (18) 超越論的な次元(超越論的主観性の次元)での(他者からの教授と学び)と自然的な次元(人間的な主観性の次元)での(他者からの教授と学び)との差異については、本論では明確にすることができなかった。この問題を考える場合、人間的な主観性の次元と超越論的主観性の次元との相互関係である「流入」が一つの手引きになるということを指摘しおきた(vgl., Hua VI, §32, §59)。

- (19) メルロー=ポンティは、こう述べている。超越論的現象学とは、「世界を見ることを学び直すこと」(Merleau-Ponty, M., op. cit., p.21, M・メルロー=ポンティ『知覚の現象学』竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、一九六七年、二四頁)である。

と。

(20)

フッサールが問い直した世界経験とは、わたしたちのさまざまな生の「目的に適った形態化としての世界の取り扱い」についての経験である。しかも、この「世界の取り扱い」は、「そのなかで統覚システムが変更され、そえゆえ、すべての他者にとってもそれが変化するような〔わたしの世界〕統覚の変転」と連動するものである (vgl. Hua XV, 601)。

もちろん、こうした世界経験を説明する超越論的現象学の探究は、「なお多くの謎をともなう」ものである。超越論的現象学は、このような多くの謎をともなう探究を通じて、「わたしたち人間を理解し、世界をより深く理解すること」(Hua XV, 150) を目指す学的営為であり、その遂行は、徹頭徹尾、「わたしたちは、自分自身と人間としてのわたしたちの世界生をいまだ理解してはいない」(ibid.) という根本洞察によって規定されている。

